様式7　授業改善プロジェクト

アクション・リサーチのまとめ

英語教員指導力向上研修

受講番号 18057　**学校名** 潮江中学校　**氏名** 川島　賢治

研究の背景

研究対象（学年、クラス等） 3年3組　**生徒数** 33 名

科目名 3年　**単位数（授業時数）** 3 時間　**使用教科書名** New Horizon 3

クラスの様子・特徴

2年生から3年生へとクラス編成変えをしていない。明るく元気なクラスで、発表できる生徒が多い。ライティングもよく頑張るクラスである。

問題の確定

基礎学力の定着。授業規律の徹底。強い記憶にするための工夫。応用文に移る前の基本文をしっかり覚えきること。

予備調査

A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学力データ
ペア活動やアンケート的な活動をよくやる。テストの範囲が決定すると、生徒はより一層学習するようになる。	ベル着席を守ろうという姿勢がある。「先生が丁寧に教えてくれた」の項目では半分以上の生徒が「そう思う」「とてもそう思う」であった。「班で協力できたか」の項目は班活動なしの授業だったので評価は低かった。	実力テストでは45～50点くらいの間である。定期テストでは60点を超える平均点であった。定期テスト時は文法事項や単語がよく記憶に残っているが、1年生や2年生で習ったことを忘れてしまっている生徒がいる。

リサーチ・クエスチョン

英語が苦手な生徒でも意欲的に取り組むことができ、こつこつ努力をする生徒が基礎学力をつけるにはどのような指導をすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1 ⇒	実践1 ⇒	検証1
目標文を繰り返し練習して、暗唱すれば、忘れることが少なくなり、強い記憶となっていくだろう。	各課の目標文を英文とその訳を並べて書いたシートを用意して、それを何度も読んで暗唱させる。それができた者は日本語の文から英文に、その逆もできるようになることを目標として練習させる。	定期テストの結果からみれば、よく取り組めていた。日本語の文を全文英作文する問題を11問出題したが、よく学習できており今までに英語の文を書いての得点ができていなかった生徒も解答できていたし、解答しようとしたことが分かる書き方であった。
仮説2 ⇒	**実践2 ⇒**	**検証2**
身近な題材で自己表現活動を多くすれば、興味を持って主体的に活動に取り組むだろう。	新しい目標文が出てくるたびに、そのパターンを繰り返し練習して英文を作る。まず話すことから入る。その後部分的に単語や動詞を入れ替えてみたり、時制を変えてみたり、否定文や疑問文にしたりできるかどうかをやってみる。	暗唱練習後に自らすすんで発表をする生徒が先に英文を読んだ。数人が挑戦した。大きな声が出ていなくても口を動かしている生徒が多くなってきた。発表できる生徒につられて次第に声を出すようになった。「習うより、慣れろ」を目標にして生徒はよくがんばった。
仮説3 ⇒	**実践3 ⇒**	**検証3**
ALTとの授業でどうしても英語で伝えたい、通じたいという場面を設定すれば、自然と英語で話さなくてはならないし、意思疎通ができたときの感動も大きくなりより一層英語に興味を持ち、学習し始めるのではないか。	ハロウィーン、携帯電話やクリスマスといった、タイムリーな話題を導入段階で使う。日米の文化の差や、教科書には取り上げられていないような英語に触れるチャンスを多くする。一人で英文を作ってたずねることが無理な生徒もいるので全員で大きな声でALTに質問するような場面も多く設定する。	英語での挨拶から始まり、リスニングをしてからそれに対して英語で質問をするというようなパターンで授業を進めた。アイコンタクトを忘れずにということを必ず付け加えるようにした。全員で同じ質問をALTにするような場合でも、アイコンタクトがあれば1対1で話しているように感じられて生徒のほうも満足そうであった。知り得ない情報を得ることができて驚きの連続だったので、生徒は最後まで興味を持って臨むことができた。

研究の成果

「パターンプラクティスをやりすぎるとその英文ばかり使って応用がきかなくなる」といったイメージがあるが、まず目標になる基本文が必要なので基礎学力をつけるためには「基本文を使えるようにまず覚える」ことが重要である。生徒が英語で話す割合や時間を自然に増やすことも大事なことである。基本文で覚えているフレーズはALTに対しても自信を持って話すことができていた。定期テストでも2学期末は平均60点を超えることができた。

今後の授業改善の課題

授業者がこだわりを持ってやるかどうかにかかっていると痛切に感じた。それと自分が教えていて楽しくないと生徒のほうも楽しく感じることは少ない。導入がうまく運べば生徒はどんどん自ら学習するようになる。毎日単調な授業になりがちなので、目で見て面白いものや、聞いて楽しいもの、生徒があっと驚くような体験を授業でできないものかを常に考え、日頃から使える教材を探して効果的に取り入れていくことが私の課題である。

リサーチについての問合せ先：　職場電話　088-832-6636　電子メール　kenji_kawashima@kt5.kochinet.ed.jp